

【書評】

ダニー・ラフェリエール著

『吾輩は日本作家である』（立花英裕訳）藤原書店、2014年

『甘い漂流』（小倉和子訳）藤原書店、2014年

Dany Laferrière

Je suis un écrivain japonais, Boréal / Grasset & Fasquelles, 2008.

Chronique de la dérive douce, VLB éditeur, 1994 (pour la première édition), Boréal / Grasset & Fasquelles, 2012 (pour la nouvelle édition).

廣松 勲

HIROMATSU Isao

日本では約2年ぶりに、ダニー・ラフェリエール（1953年）の邦訳『吾輩は日本作家である』と『甘い漂流』が刊行された。これまでに邦訳としては、2011年に『ハイチ地震日記 私のまわりですべてが揺れる』とメデイシス賞受賞作の『帰還の謎』、さらに2012年にデビュー作の『ニグロと疲れないでセックスする方法』が刊行されている（上記新刊を含め、いずれも藤原書店刊）。冊数から見ると、現在のところ、ラフェリエールは最も多くの著作が邦訳されているケベック文学の作家といえる。

なぜこれだけの期間に、日本において5冊もの小説作品が出版されることになったのだろうか。もちろん、いずれの訳者あとがきでも言及されるように、出版社との良好な関係がその大きな要因の1つとして考えられるだろう。ただ、もちろんこのような出版経緯だけではなく、ラフェリエールが「旅」や「根付き」を物語上の主たるテーマとしながら、ハイチ・ケベック（モントリオール）・フロリダ・フランス・日本といった複数の時空間・文化圏を横断する登場人物たちを物語の中心に据えているという点も挙げられる。昨今、グローバル化やグローバル人材といった言葉が巷に溢れかえる日本において、そのような作品は、ローカルとグローバルを同時に生きる術を模索するために貴重な資料であると考えられるのである。

ここで、時空間や文化圏を横断しながら織り上げられるラフェリエールの物語世界をよりよく理解するためにも、作者自身の経歴をごく簡単にでも素描しておく必要があるだろう。それというもの、彼の作品群は、ほぼすべて

が自伝的要素を組み込んだ小説に属するといえるからである。

ダニー・ラフェリエール（本名：Windsor Klébert Laferrière）は、1953年にハイチの首都ポルト・フランスに生まれた後、祖母とともに南西部プティ・ゴアヴで幼年期を過ごした。その後、デュバリエ独裁政権による恐怖政治が敷かれる中、成人を迎えた彼は「Le petit samedi soir」誌と「Radio Haïti-Inter」の文化記者として活躍したが、友人のジャーナリストが秘密警察トントン・マクトに殺害されたことをきっかけに国外へ移住することを決意する。そして、1976年、モンリオール・オリンピック開催の年に、ケベック州の最大の都市モンリオールに移り住んだ。とはいえ、彼は移住後すぐに作家活動を始めたわけではなく、1985年にケベック州において作家デビューするまで、工場勤務やテレビの天気予報士など、様々な職業に就きながら糊塗を凌いできた。また1990年代には、アメリカ・フロリダ州のマイアミに家族で移住はしたが、2000年代からは再びケベックの地にて作家活動を続けている。最近では、2013年12月にカナダ、ケベック、ハイチ出身者としては初めてフランスのアカデミー・フランセーズの会員として選出された。この選出については毀誉褒貶相半ばする意見はあったものの、そのような反響が生まれた点も含めて、名実ともに現代フランス語圏文学における代表的作家となったといえよう。

このような経歴を見ると、ラフェリエールの華々しい作家活動は、10年程度の長い作家修行を経て1980年代半ばに開始されたことが分かる。また、独裁政権や移民生活、そして近年のハイチ地震といった主要な出来事だけでなく、彼がこれまでに就いた多様な職業も、物語内にそれぞれの社会の仕組みを描き出すために、また彼の物語世界を創造するために必要不可欠な材料であるといえる。これらの素材を元にして書き継がれてきた彼の自伝的小説群は、作者自身によって「アメリカ的自伝」という呼称で纏められてきたが、しかし近年出版された作品群は必ずしもその分類には含まれていないようである。とはいえ、これまでに邦訳が刊行された作品群の位置付けを理解するためにも、物語内容に注目しつつ、以下のように彼の作品群を5つに分類しておこう。

1. モントリオールへの到着とハイチへの帰還を扱った物語

『甘い漂流』、『帰還の謎』など

2. モントリオールを中心舞台にした移民たちの物語

『ニグロと疲れしないでセックスする方法』、『吾輩は日本作家である』な

ど

3. ハイチを舞台にした幼年期の物語

『コーヒーの香り』（未訳）、『僕はヴァヴァが大好き』（未訳）など

4. 歴史的出来事に基づいたルポルタージュ形式の物語

『ハイチ地震日記 私のまわりですべてが揺れる』など

5. 自作を論じたエッセイ・インタビューを含んだ作品

『私は疲れた』（未訳）、『私は生きるように書く』（未訳）など

以上のような経歴と分類を念頭に置くと、これまでに邦訳された作品のほとんどは、彼の移民経験を主な素材とした作品群であったといえる。ハイチを中心舞台とした作品やエッセイ・インタビュー形式を取り入れた作品については、未だ邦訳は刊行されていない。

この分類によるならば、今回邦訳の刊行された『甘い漂流』は、作家ラフェリエールの誕生日前夜について語られた作品であるといえるだろう。それというのも、主人公「ぼく」による故郷ハイチへの帰還を扱った『帰還の謎』とは対照的に、本作は主人公「ぼく」がハイチを離れてモンリオールに到着した直後の状況を題材にした物語だからである。「ぼく」は様々な地域から来た移民たちも勤務する工場で働く一方で、私生活では性格の異なった複数のケベック女性たちと関係を持つことで、徐々にケベック社会での生活になじんでいく。他の作品と同様に、どの文化圏に属する人々も「ステレオタイプ」を通じて描かれるものの、或る意味では過度に誇張されたその人物造形は私たち読者に「ステレオタイプ」に則った認識様式への反省的視線を示唆してくれる。

もう一作の新たな邦訳である『吾輩は日本作家である』は、モンリオールで作家活動を行う主人公「私」が編集者からの新刊出版の催促に対して思い付いた「吾輩は日本作家である」というタイトルを巡る物語である。彼は未だ書かれていない作品に対する国外での大きな反響に戸惑いながら、しかしだからといって作品制作に勤しむわけでもなく、日本人の女性アーティストたちとの関係を深めていく。結局、主人公はこの作品を完成せずに本作は終わってしまうが、私たち読者は本作品が書かれつつあるそのプロセス自体を「吾輩は日本作家である」という作品として読むことになる。本作品も移民の登場人物それぞれに対する「ステレオタイプ」に満ちた物語ではあるが、『甘い漂流』と比べると、さらに数歩踏み込んで「ステレオタイプ」に則った認識様式を物語を介して考察しつつ、かつそれを脱構築するような内容と

なっている。

ここで物語形式に注目すならば、特に『甘い漂流』を見てみると、ラフェリエールの作品に特徴的な詩的文章と散文を交えた断章形式を取っている。訳者解説においても詳しく言及されている通り、本書の初版では、全編が必ずしも韻律はもたない詩的な改行によって構成されていた。今回の邦訳の原典とされる新版では、初版から大幅に改稿され、途中途中で散文的文章が挿入されることになった。ラフェリエールが『帰還の謎』においてその形式上の1つの到達点に至ったと考えるならば、本作と対となる『甘い漂流』についても同様の形式に書き換える必要があると判断したのだと推測できるかもしれない。また、当然ながら、彼の愛好する物書きの1人である松尾芭蕉の『奥の細道』から、その形式面での影響を読み取ることも可能であるだろう。最後に、翻訳文について付言するならば、既にラフェリエール作品の翻訳者である2人による翻訳によって、作者の軽妙洒脱な言葉は、その特質を減ずることなく、非常に読み易い日本語へと生まれ変わっている。とりわけ、翻訳が困難だったと思われる『吾輩は日本作家である』における俳句の引用に関しても、日本語原典ではなく、フランス語引用を翻訳する形式を取ったことで、物語の流れを分断することなく理解し易いものとなった。ただ、これまでの翻訳も合わせて1つ贅沢な希望を述べるならば、主人公の1人称はいずれかに統一した方が良かったかもしれない。それというのも、ラフェリエールの作品群には物語内容の間テキスト性が散見されるため、ほとんどの作品がより大きな物語の一断面であるとも考えられるからである。ハイチ・ケベック版「人間喜劇」というのは言い過ぎかもしれないが、少なくともこれまでの作品全体の1つの連続性を付けるために、1人称の統一は必要であったようにも思われる。

さて、今回翻訳された作品は、現代フランス語圏文学において内容的にも形式的にも最も優れた成果の一部であると考えられるだけに、今後日本における当該分野における研究の可能性を開拓・拡大したという意義も大きいだろう。1990年代の日本における「クレオール文学」ブームのように大きな反響はないかもしれないが、今後も少しずつ、各地域のフランス語圏文学の多様性・異質性（または普遍性と同質性）を理解するための資料が増えていくことを望んでやまない。

(ひろまついさお 法政大学)

参考文献

- 廣松勲（2012）「書評：『帰還の謎』『ハイチ震災日記 私のまわりのすべてが揺れる』」『ケベック研究』第4号、126～131頁。
- ダニー・ラフェリエール（2011）『帰還の謎』（小倉和子訳）藤原書店。
- （2011）『ハイチ震災日記 私のまわりのすべてが揺れる』（立花英裕訳）藤原書店。
- （2012）『ニグロと疲れないでセックスする方法』（立花英裕訳）藤原書店。
- 小倉和子（2014）「ダニー・ラフェリエールのアカデミー・フランセーズ入り」『ケベック研究』特別号・小畑精和先生追悼論集「異文化を紡ぐ文学：間文化主義の可能性」、149～157頁。
- 立花英裕（2014）「ダニー・ラフェリエールと世界文学」『ケベック研究』特別号・小畑精和先生追悼論集「異文化を紡ぐ文学：間文化主義の可能性」、88～98頁。